

2 今、英語教育に求められるもの

国際化や社会の変化に伴い、英語教育における改革も急速に進んでいます。英語で積極的にコミュニケーションを図る態度を育むとともに、生涯にわたって英語を学び続け、世界を舞台に活躍できる人材の育成が求められています。ここでは、生徒の将来を見通し、効果的な指導を行うための指針を示します。

1 CAN-DOリストの活用

生徒がどのような英語力を身に付けることができるのかを、高校卒業時及び学年ごとの「学習到達目標」として示した、各学校のCAN-DOリストを活用しましょう。教師が共通理解に基づき、生徒の学びをサポートするための指針となります。また、生徒にも学習到達目標を示すことにより、見通しを立てて学習に取り組ませる手助けとなります。また、他教科の教師や保護者にもCAN-DOリストを示し、学習到達目標を共有しましょう。このCAN-DOリストを基に、年間学習指導計画を立てます。さらに、単元構想において、単元の目標を達成するための言語活動や、単元の評価基準と評価方法を、評価の観点や4技能のバランスを考慮しながら定めます。



日々の授業が、右上の図のように、学校目標、CAN-DOリスト、年間学習指導(評価)計画、単元構想に基づいたものであることを常に意識し、つながりのある一貫した指導を心がけましょう。学年末に生徒の学習到達目標を確認して、CAN-DOリストの見直しを図ることも必要です。

CAN-DOリストでは、学習到達目標が積み上げ式で示されていますが、英語の習得の過程では、学期・学年ごとの計画に基づき、繰り返し4技能を学習活動に取り入れ、知識や技能を身に付けさせることを重視します。

2 新しい時代に求められる資質・能力の育成

(1) 思考力、判断力、表現力等の育成

英語の授業では、教師が中心となり「教える」授業から、生徒が主体的に「学ぶ」授業への転換が求められています。授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、生徒同士が自分の意見や考えを英語で伝え合う機会を授業の中で増やすことが必要です。言語活動を行う上で、「聞くこと」、「話すこと(やり取り・発表)」、「読むこと」、「書くこと」を効果的に結び付ける工夫をしましょう。例えば、「読むこと」や「聞くこと」によって、概要や要点を捉えさせ、それについて英語で話し合わせたり、話し合った内容を要約させたりすることで「話すこと」や「書くこと」につなげることができます。さらに、題材の内容に関して、自分の意見や考えを発表したり、討論したりする活動に発展させることもできます。複数の技能を個別に扱うのではなく、互いに関連付けながら、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが必要です。

(2) 生きて働く知識・技能の習得

コミュニケーション能力を育成するためには、英語のインプットとアウトプットのつながりやバランスを考えることが大切です。インプットに偏ると授業が解説中心となり、インプットが不足するとアウトプットが量的にも質的にも不十分なものになります。また、インプットとアウトプットを有機的に関連付け、新しい知識を生徒に理解させた上で使わせるのではなく、それを生徒に使わせながら気付きや理解を促すように指導すると効果的です。文法や語彙などの知識をコミュニケーションを支えるものとして捉え、例えば「電話の応答」のような具体的な言語の使用場面を設定し、ペア・ワークやグループ・ワークによる言語活動を通して、活用できる知識として定着を図りましょう。

(3) 発信力の強化

多様な考え方ができる話題について、意見を伝え合う活動を設定し、論理的に表現したり、即興で話したりする力を養いましょう。例えば、授業にスピーチやプレゼンテーション、ディスカッションやディベートなどの言語活動を取り入れ、自分の意見の論点や根拠を明らかにして相手に分かりやすく伝え、相手の質問や反論に即興

で対応できる力を育成しましょう。論理の展開や表現の方法を工夫させ、意見の裏付けとなる情報や資料を、ICT機器を活用させるなどして、生徒が自主的に探し活用できるように指導することも大切です。また、聞き手には質問や感想を返させるなど、即興で伝え合うような双方向的な活動を目指しましょう。

(4) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

自ら課題を発見してその解決に向けて、ペアやグループで取り組み、理解を深めるような学びを多くの場面で取り入れましょう。例えば、教科書の題材に応じて、環境問題の解決や宇宙開発の在り方など、答えが一つに限定されない課題について、ディスカッションやディベートの形で取り組む活動があります。学び合いや考えを伝え合う活動を通して、さまざまな知識や情報が結び付き、内容理解が深まることで、学習への動機付けや興味・関心が更に高まることが期待できます。学習の過程で生徒の思考が活性化され、より広い視野から問題を捉え、高い次元で考えて課題を解決できる力を養うことを目指しましょう。

3 学習評価の工夫

「指導と評価の充実に向けて ～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～」(愛知県総合教育センター)にも、詳しく解説されています。

(1) 観点別評価

学習到達目標に照らして、生徒の学習状況を「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」の観点から評価します。それぞれの観点について、年間学習指導計画や単元構想の中で、単元の評価規準を設定し、評価方法を明確にします。定期考査の設問ごとに評価の観点を明示し、答案返却後、生徒に観点別の学習到達度を把握させるなどの工夫もできます。

さらに、定期考査だけでは測ることのできない力を評価し、生徒の学びを見取るために、パフォーマンステストを実施したり、授業中の活動を継続的に観察したりすることが求められます。

(2) パフォーマンス評価

年間を通して「聞くこと」「話すこと(やり取り・発表)」「読むこと」「書くこと」について総合的に評価するために、パフォーマンステストを実施することが必要です。スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー、エッセイ・ライティング等の課題に取り組みさせることによって、身に付いた力や学習成果を評価します。

パフォーマンス評価を行う際には、測りたい能力(評価項目)を明確にした上で、ルーブリック(評価基準表)を作成しましょう。「何をどのように評価するのか」という基準を教師間で共有することで、評価に差が出にくくなり、評価の信頼性が高まります。ルーブリックを事前に示すことで、生徒は何を学ぶべきかが分かり、学習に取り組みやすくなることが期待できます。また、タブレット端末などを活用し、パフォーマンスの様子を記録することで、ポートフォリオを作成することも可能です。生徒の学習成果や課題を的確に把握し、それを生徒に還元することで、学習意欲の向上や学習方法の改善につなげることができます。また、評価内容を教師の振り返りや授業改善にも生かし、指導と評価の一体化を図りましょう。

【関連資料：パフォーマンステスト例(インタビューテスト)】

内容㉞：指定された三つのキーワードを用いて、本文全体の内容を口頭で要約する。

内容㉟：その後、自分の将来の夢について話す。

《ルーブリック》 *表中の()内の数字は配点を示す。「内容㉞㉟」と「声の大きさ」の配点を「正確さ」よりも高くすることにより、内容を重視しながら、間違いを恐れずに話すことを促し、単元のポイントを強調することができる。

	A	B	C
内容㉞	三つのキーワードを使い、分かりやすく内容を伝えることができる。(6)	三つのキーワードを使い、おおよその内容を伝えることができる。(4)	おおよその内容を伝えることができていない。(1)
内容㉟	自分の将来の夢を具体的な理由とともに伝えることができる。(6)	自分の将来の夢を伝えることができる。(4)	自分の将来の夢を伝えることができていない。(1)
声の大きさ	はっきりと聞き取ることができる適度な大きさである。(5)	聞き取りにくい部分もあるが、おおよその内容を聞き取ることができる大きさである。(3)	聞き取ることが難しいほどの大きさである。(1)
正確さ	文法、語法等の誤りがほとんどない。(3)	文法、語法等の誤りがあるが、意味内容の伝達を妨げるほどではない。(2)	文法、語法等の誤りが多く、意味内容の伝達が妨げられている。(1)